追い下された赤い猪
――古代前後期文学の方法――

田村俊介

一、古事記研究の現在

最近上梓された『古事記スサノヲの研究』の中で、山田永氏は、次のように述べて居られる（注1）。

古事記を読む。するとわからない箇所に遭遇する。語句の訓みや意味はもちろんのこと、物語の展開上つじつまのあわぬ部分があるからである。（略）すると、五～六行戻って読み直す。それでもわからないと、誤植があるのかと疑ったりする。時には、古事記の本文そのものをあやしんだりもする。挙げ句の果てには、古事記は矛盾を抱え込んだ書物だからと決めつけ、気にせず先へ読み進める場合もある。しかし、それで古事記を読んだといえるだろうか。その前に問いたいのは、その箇所は本当に「矛盾」していて、物語の展開が「不自然」なのだろうか、ということである。

次に、成りし神の名は、国之常立神。次に、豊雲野神。此の二柱の神も亦、独神と成り坐して、身を隠しき。次に、成りし神の名は、宇比地邇神。次に、妹須比智邇神。次に、角杙神。次に、妹活杙神。次に、意富斗能地神。次に、妹大斗乃弁神。次に、於母蛇流神。次に、妹阿夜訶志古泥神。次に、伊耶那岐神。次に、伊耶那美神。

これを「神世七代と称ふ」とある。これは、おかしい。どう数えても一二柱である。しかし、現在この箇所を「おかしい」という人はいない。なぜなら、その直後に次のような割注が古事記自体に記されているからである。

【上の二柱の独神は、各一代と云ふ。次に双べる十はしらの神は、各二はしらの神を合せて一代と云ふ。】

もしこの割注がなかったら、どうなっていたか。「并せて神世七代と称ふ」の前に、脱文（全く別の七柱の神々が誕生する神話の脱落）を想定する説が提出されていたかもしれない。「七代」は「十二代」の誤字であるという説がまかりとおっていたかもしれない。「やはり古事記は矛盾が多い」とすまされてしまうかもわからない。ところが、それが「矛盾」でも何でもない読み方が古事記自体に示されている。「独神は一代で、双神は二神で一代と数える」という現代人では誰も気づかぬ数え方が古事記に記されているのである。

（「はじめに――問題の提起と方法――」。略は引用者）

私は、「御馳走」を「自由に」食べたいという「欲求」をおさえることはできない。古事記は、おいしい「御馳走」だからである。せっかくの「御馳走」だから、残さず丸ごと食べたい。料理人なら、「この食材は」「この調味料は」と考えながら、自分が次に料理する時の参考にするかもしれない。新鮮な食材・厳選された調味料などにおいしさの理由を求めることも当然である。ひょっとすると、ネタをシャリから剝がして別々に食べ、後からわさびと醤油をなめて、一つ一つの素材を吟味するかもしれない。だが私は、それらがあわさった寿司を食べたい。個々の素材のおいしさとは別の、まとめられた作品としてのおいしさも味わいたい。

（「あとがき」）

このように一見つじつまが合わない箇所で、立ち止まって考えて、「その「箇所」は本当に「矛盾」していて、物語の展開が「不自然」なのだろうか」と問い掛け、矛盾を解消した例として、昭和五四年の集成本の「天の若日子（あめのわかひこ）」物語の解釈が挙げられよう。「天の若日子」物語は更に

①天の若日子の派遣（78頁9行目～79頁）
②天の若日子の反逆（80頁～81頁6行目）
③天の若日子の死　（81頁7行目～83頁5行目）

（以上、小見出しも集成本に拠る）

の三つの部分に分けられるが、①と②、②と③との間に、一見矛盾と見える記述がある。まず天の若日子を派遣した神は、①では、

高御産巣日（たかみむすひ）の神・天照大御神（あまでらすおほみかみ）

であったのに対し、②では、

天照大御神（あまでらすおほみかみ）・高木（たか

ぎ）の神

と記され、「高木の神」に関しては、

この高木の神は、高御産巣日の神の別名（ことなぞ。

と説明が加えられている。この点に就いて、集成本は、

なぜ名を変えたのか。高御産巣日神は、その名のとおり、生成して止まぬ日（ひ）の神であった。すると、日神の神格をもつ天照大御神とイメージが重なりすぎる。それで、別名の高木神に変えたのである。高木神は文字通り高い木の神で、神話学上の宇宙樹に相当する。具体的には、新嘗祭や大嘗祭の折、「ひもろぎ」（榊などの神木）に高御産巣日神を降臨させたことから、この神を高木神というようになったもの。

という頭注を施している。次に、天の若日子に与えられた矢は、①では、

天のまかこ矢・天のはは矢

であったのに対し、②では、

天のはじ弓・天のかく矢

と記されている点に就いては、

「天の」は「天上界のもの」であることを表している。「まかこ弓」は「真鹿児弓（まかこゆみ）」で鹿をよく射止める弓。「天のはは矢」は「大蛇矢（ははや）」で大蛇をよく射殺す矢。ともに獲物（さち）の名を冠して称辞とする。次頁六～七行目では「天のはじ弓・天のかく矢」と名が変る。これは、「櫨（はじ）材の弓・輝く鏃（やじり）をもって命名したもので、同一物である。

という頭注を施している。現古事記を一箇の有機的統一体を見做し、一見「異なった資料による記述が原因であろう。」と思われる名称の変更（昭和四八年の全集の注）に就いても、むしろ、作品の豊かさとして積極的に評価しようという態度であろう。

更に、平成九年の新全集本の校注をなさっているお二人の業績がある。山口佳紀氏は、

ここで述べておきたいことは、古事記の本文や注に対する疑問を成立論に持ち込んで解消することの危うさである。確かに、古事記における本文や注の様態には、我々の眼から見て、一見不可解と思われる点が少なくない。しかし、その不可解さは、単に我々が古事記をよく読んでいないことに基づく場合が少なくないのではないか。成立論的解決を求める前に、我々はもっと古事記自体の読解を進めるべきであると考える。（注2）

と述べ、特に神野志隆光氏は、『日本書紀』を別個な作品としてとらえることと併せて、『古事記』研究に就いての次のような提言をなさっている。

成立論的研究は、『古事記』の作品としての全体を考えることなく、個別の話を取り出し、筋だての上で比較検討して原形・発展を考えることに陥ってしまっていたと批判しなければならないであろう。『古事記』を全体として見るより、切り離して個々の話を考察するというのは、作品の解体というほかない。

あたりまえのことだが、『古事記』を一つの作品としてとらえることが第一義であろう。それは『古事記』が完璧だということではない。矛盾や不審を含みつつ、それで一つの論理をもって成り立つ全体としてとらえることが必要だということである。（注3）

以上、先学諸賢の提言に、私は心から、強い共鳴をおぼえた。後進の身で不遜な物言いをお許し頂けるならば、古代後期の『源氏物語』の研究に於いて私が常に心がけてきたのはまさしくこのような姿勢であって、早くに山田氏をはじめとする『古事記』の学者を知っていれば、『源氏物語』研究を進める際にももっと心強かったのにと悔やんでいるくらいである。

『源氏物語』を読む。ということは、現在のほとんどの学者にとって、青表紙本系の大島本グループを底本とする校注書を読むことを意味する。相対的に不審の少ない底本ではあるが、それでも、つじつまのあわぬ部分に遭遇する。すると、五～六行戻って読み直す。それでもわからないと、誤植があるのかと疑ったりする。時には、河内本本文（本稿では、学界一般に河内本本文と思われているもの、即ち、尾州家本見セ消チ補入後の本文を指して言うことにする）や別本のほうが古態を保つと判断を下し、青表紙本系の大島本グループの本文をあやしんだりもする。例えば、総角巻末の自然描写に

四方（よも）の山の鏡と見ゆる汀（みぎは）の氷、月影にいとおもしろし。（323頁）

という一文がある。右は、昭和五〇年の全集『源氏物語』第五巻からの引用であるが、上段の注

一面に雪の積もった周囲の山の姿が映っていて、その水際の氷が月光にきらめいている景色。凄涼の趣が深い。

や、下段の現代語訳

四方の山を鏡のように映している水際の氷が、月光の下でまことに美しく見える。

は、よくわからない。そこで、金子元臣氏のように、河内本や一部の別本の本文に従って、

四方の山の鏡と見ゆる月影に、汀の氷れるあたり、

いと面白し。

と校訂する方も出てくる（注4）。しかしながら、この箇所は、助詞「の」の同格の用法、「鏡」の比喩が「鏡のように光る」であることという、現代人では誰も気づかぬ発想――と言うと言い過ぎであるが、現代人が見落しがちな平安時代の発想に着目し、

四方の山の鏡と見ゆる、汀の氷、月影にいとおもしろし。

【訳】（雪をかぶった）四方の山々が（きらきらと輝いて）鏡のように見えるが、その山々と、岸辺の氷は、（どちらも）月の光を浴びてまことに趣深い。

と解釈した（昭和六三年七月。注5）。

又、帚木巻を読む。すると、物語の展開上、桐壺巻とつじつまのあわぬように見える部分がある。そこで、第二帖「帚木」の前に、現在では窺い知ることのできない光源氏説話があって、「帚木」は第一帖「桐壺」ではなくこれを受けているのだと仮説したのが大正十一年の和辻哲郎氏（注6）であり、現在では窺い知ることのできない「輝く日の宮」があったと仮説するのが昭和十五年の玉上琢彌氏（注7）である。このような想定は、玉鬘系後記説という「仮説の上に立った仮説」として非難を浴びた（注8）が、玉鬘系後記説が否定された（注9）平成になっても、鈴木日出男氏は、平成三年「源氏物語作中人物論事典　光源氏」（注10）、平成七年「源氏物語の成立」（注11）に於いて、どういうわけか好んで取り上げて居られる。

しかしながら、第三十帖「藤袴」から第三十一帖「真木柱」への展開を参照すれば、第一帖「桐壺」から第二帖「帚木」への展開も決して「不自然」ではないと主張したのが平成八年の「光源氏物語現行形態試論第四――大正十一年和辻論文の諸問題――」（注12）である。

二十一世紀に入った現時点でもなお、『源氏物語』の所謂第一部の巻々に関して現行形態は原初形態とは違うのだという認識が行き渡っているとすれば、右の和辻氏論文に端的に示されている通り、内部徴証に拠る成立論の遺産である。二十世紀の『源氏物語』成立論は、主として、内部徴証にたよったものであった。極端な言い方をすれば、武田宗俊氏の玉鬘系後記説（注13）に対しては、「成立論は外部徴証に基づいて行うべきなのに」という非難が矢のように浴びせかけられたが、他の論者、他の仮説は同じ非難の標的とならなかった。その根底に

は、現行形態の『源氏物語』を長編として読む場合には物語の展開上どうしてもつじつまのあわぬ部分があるという漠然とした認識があった。

同じ古代後期文学でも『伊勢物語』の成立論は外部徴証から出発しているので、むしろこれに従わなかったり耳を傾けなかったりするほうが不自然であり、或いは、意地を張っているように見えてしまう。

しかしながら、内部徴証に基づいて成立論を行う場合には、その前に、その箇所は本当に「矛盾」していて、物語の展開が「不自然」なのだろうか、と問うてみる必要がある。その結果、研究対象とする作品の次の時代の発想、次の次の時代の発想、そして現代の発想とも違う当該作品だけのかけがえのない個性を発見する可能性があるからである。一見矛盾と見える点を、従来の研究に無い新しい視点で解釈し直し、客観的な説得力を獲得すること、これこそが、対象がいかなる作品であろうとも、古典文学研究の醍醐味である。

『古事記』の場合、『源氏』と違って、幾つかの原資料が存在したことはしたらしい。しかしながら、その実態の想定は、例えば、現行の半分以下の章段から成る、より早い時期の『伊勢物語』を、『雅平本業平集』や『在中将集』とに基づいて想定する研究（注14）などと比べたら、具体性を欠くだろう。ならば、それらを一つにまとめた、現『古事記』撰録者の意向を重んじたい。人間である以上完璧は期待しにくいが、撰録者としては、つじつまの合わぬところが残らぬよう意を払ったであろう。即ち、山田氏の言われるように、まとめられた作品としてのおいしさを味わいたい。少なくとも、倭建物語や大穴牟遅神の物語は、一箇の有機的統一体と看做すことができるはずである。

二、追い下された赤い猪

本拙稿が出発点とする中心テーマは、大穴牟遅神の戦いの物語であり、大国主がまだ「大穴牟遅神」と呼ばれていた時期に相当する。今、この部分を、およそ七つの部分に分けてみよう。頁数行数は、引用テクストである集成本のものである。

〔一〕「大き石（いは）」との戦い　〈伯岐の国〉　60頁14行目「かれしかして」から61頁10行目まで

〔二〕「大き樹」との戦い　〈伯岐の国〉　61頁11行目から62頁4行目「違へ遣りたまひき。」まで

〔三〕八十神、矢をつがえる　〈木の国〉　62頁4行目「しかして、」から7行目まで

〔四〕「蛇（へみ）」との戦い　〈根の国　蛇の室（むろや）〉　62頁8行

目から63頁6行目「出でましき。」まで
〔五〕むかでと蜂との室　〈根の国　むかでと蜂との室〉　63頁6行目「また来日」から8行目「出でましき。」まで
〔六〕野火との戦い　〈根の国　大野〉　63頁8行目「また、鳴鏑を」から64頁4行目「奉りし時に、」まで
〔七〕スサノヲの頭のしらみ　〈根の国　八田間の大室〉　64頁4行目「家に率入りて」から9行目「寝ねましき」
〔八〕スサノヲからの脱走

以上のように大穴牟遅神は、〔三〕までは兄弟である八十神を相手に、〔四〕以降は義父であるスサノヲを相手に、命を懸けた様々な戦いを繰り拡げることになったのだが、その最初の戦いが〔一〕である。

かれしかして（＝八上比売が八十神の求婚を拒否して「大穴牟遅の神に嫁（あ）はむ」と言ったので）、八十神忿りて、大穴牟遅の神を殺さむとし、共に議りて、伯岐の国の手間の山本に至りて云ひしく、

「赤き猪、この山にあり。かれ、われ、共に追ひ下せば、なれ待ち取れ。もし待ち取らずは、必ずなれを殺さむ」と云ひて、火もちて猪に似たる大き石を焼きて転ばし落しき。しかして、追ひ下すを取らす時に、すなはちその石に焼き著かえて死にき。（以下略）

（カッコ内は引用者）（注15）

諸説紛々としているのは「追ひ下すを取らす時に」の解釈であるが、その諸説を紹介する前に、二、三お断わりしておきたいことがある。まず、この部分の原表記は

追下取時

であって、尊敬の助動詞「す」は、集成本の校訂者西宮一民氏の補読なのである。この問題に関して参照しなければならないのは、山口佳紀氏「古事記における敬語の表記と訓読――為手尊敬の場合――」（注16）である。山口氏は第三節で、「立_天浮橋_而」の「立」に「訓立云多々志」という訓注が加えられていることに着目なさって、次のように述べて居られる。

ここで注意すべきは、右のような潜在的とも言うべき尊敬のスの存在である。このスは、特定の動詞につく場合を除いて、訓字表記されることはなかった。これは、特定の動詞につく慣用的な場合は別として、尊敬のスを表記すべき適当な訓字がなかったためと考えられる。しかし、潜在的なスの存在を認

めるならば、読者は、古事記の訓読に当たって、しばしば尊敬のスを補読することを期待されていると考えざるを得ない。

この理論を応用するならば、当然、「追ひ下すを取らす」と読むことを期待されていると考えざるを得ない。しかしながら、同じ論文の第四節では、

古事記において、スを補読することには、相応の理由がある。（略）ただし、それをどの個所に補読するかは、また別の問題である。　（略は引用者）

と述べられている。従って、「追ひ下すを取る」と読んでも構わないということになり、現に新全集も「取る」である。本拙稿の論旨の上からも「取る」でも「取らす」でもどちらでも構わないので、論点の単純化を図って、「追ひ下すを取る」という読みを前提に、先に進むことにする。

次に、「追ひ下す」の訓みは引用テクストの集成本の「オヒクダス」に対し、大系本では「オヒオロス」であった。仁徳記の

大后、この御歌を聞きて、いたく忿りたまひて、人を大浦に遣はして、追ひ下して、歩より追ひ去りたまひき。　（207頁）

という一文の中の、「船からおろす」という意味の「追ひ下す」という複合動詞と、この「追ひ下す」とは、性格が違うだろう。だとすれば「神代記　オヒクダス　仁徳記　オヒオロス」か「神代記　オヒオロス　仁徳記　オヒクダス」か、どちらかを選ばなければならないが、どちらかと言えば、集成のように、前者を選ぶことにしたい。本拙稿の表題も「おいくだされたあかいいのしし」とお読み頂ければ幸いである。

又、「猪に似たる大き石」の「大き石」も、「大き石（イシ）」や「大石（オホイシ）」と訓む校注書もあったが、これもやはり、本拙稿の論旨の上からは、いずれでも構わない。引用テクストに集成を選んだ手前、仮に「大き石（イハ）」と訓むことにしたい。

前置きが長くなってしまったが、それでは「追下取時」の解釈を、第一説から第四説まで、四つのグループに分けて、紹介して行く。

第一説は、「追下」を他動詞、目的語を「石」とする説で、例えば、昭和四八年の全集本である。全集は、中段の釈文を、

火を以ちて猪に似たる大石を焼きて転ばし落しき。爾に追ひ下すを取る時、即ち其の石に焼き著かえて死にたまひき。

とし、下段の現代語訳を

火で猪に似た大きな石を焼いて、それをころがし落とした。そこで追い落とした焼石を大穴牟遅神が捕えると、たちまちにその石に焼きつかれて死んでしまわれた。

としている。「転ばし落しき」を「ころがし落とした」、「追ひ下す」を「追い落とした」と訳しているところを見ると、全く同じ内容が重複して記されたということになるのではなかろうか。この点を気にしたのが、本居宣長の『古事記伝』である。『古事記伝』は、実際には「追下」を自動詞と考えて居り、従って、後に紹介する予定である第四説の草分けなのであるが、仮に他動詞だと考えた場合、「取」の目的語を「石」だとして、

かの石を下すことゝせば、上に転落とあるとかさなりて、わづらはしきをや

と述べている（注17）。しかしながら、昭和五三年の『鑑賞日本古典文学』にも、「取」の目的語を「石」とする説は、受け継がれてしまった。このあたり、

火で猪に似た大きな石を焼いて、それをころがし落としました。そこで、神々が追い下した石を、大穴牟遅神が手にお取りになったとき、たちまち、神はその石に焼きつかれて死んでしまわれました。

と訳されている。

第二説は、「追下」を他動詞、目的語を「それ」とするものである。集成という叢書は、それぞれの作品の校訂者が主語や目的語を〔　〕内に記すという方針を取っているのだが、集成『古事記』のこの一文は、

しかして、〔八十神がそれを〕追ひ下すを〔大穴牟遅神が〕取らす時に、

のように記されていた。〔　〕内の「それ」は何を指すのか。上の段にも判然と記されてはいない。だとすれば、私は、直前の語＝「大き石」を指すと受け止めざるを得ない。その場合、結局、第一説と全く同じということになろう。

以上、第一説第二説として紹介して来た諸説の一番の弱点は、「追ひ下す」という動詞の目的語として「石」は熟さないということである。私は『古事記』全体の中から、動詞「追ふ」の用例、及び「追ふ」を第一動詞に持つ複合動詞の用例、合わせて三十八例を調査した。その結果、目的語は人（神）や魚、鳥、つまり生き物であることがわかった。

㉜～㉝（目的語は黒姫）

大后（＝仁徳帝の后）、この御歌（＝仁徳帝の黒姫の愛情のこもった歌）を聞きて、いたく忿りたまひて、人を大浦に遣はして、（船から）追ひ下しして、

歩より 追ひ去り たまひき。

（207頁3行目）

⑮（目的語は、さまざまの魚）

ここに、猨田毗古の神を送りて還り到りて、すなはちことごと鰭の広物・鰭の狭物を 追ひ聚め て問ひて言ひしく、

「なは、天つ神の御子に仕へまつらむや」

といひし時に、もろもろの魚、みな

「仕へまつらむ」

と白す中に、海鼠白さず。

（93頁2行目）

⑯（目的語は兄宇迦斯）

（天皇軍の二人の将軍は）兄宇迦斯を召びて、罵詈りて云ひしく、

「いが作り仕へまつれる大殿の内には、おれ先づ入りて、その仕へまつらむとする状を明し白せ」

といひて、すなはち横刀の手上を握りしばり、矛ゆけ矢刺して、 追ひ入るる 時に、すなはちおのが作れる押に打たえて死にき（＝兄宇迦斯が天皇たちを打つために自分で作った押機（＝ばね）に打たれて死んでしまった）。

（115頁12行目）

右の㉜や⑮、⑯の場合、主語の人物が目的語の生き物を威嚇しつつ移動させる、その移動の方向が「下す」、「聚む」、下二段「入る」に拠って特定されるという、語の性質が顕著になっている。その意味で、八十神の詞

赤き猪、この山にあり。かれ、われ、共に追ひ下せば、

はまことに古事記的な言葉遣いと言うことができよう。

そこで第三説として私が提唱したいのは、この地の文の「追ひ下す」（＝「追ひ下す」の連体形）の具体的な内容を、八十神の詞の中の「追ひ下せ（＝「追ひ下す」の已然形）」と同様に、この地の文の「取る（＝「取るの連体形）」の具体的内容を、八十神の詞の中の「待ち取れ（＝「待ち取る」の命令形）」と同様に考えるというものである。現代語訳を試みると、

八十神が追い下した赤い猪を待ち構えて殺そうとしていると、たちまちその焼け石の下敷きになり、その焼け石が体中にまとわりついて死んでしまった。

であり、現在出版済みである活字の中では、唯一、三浦佑之氏の現代語訳に近い。

そこで、言われたとおりに、追い下ろされた赤いイノシシを待ち獲るとの、そのまま、焼けた岩に押しつぶされて、オホナムヂは死んでしもうた。

（注18）

そして、釈文に就いてであるが、景行記の出雲建との

戦いの記事は、原表記は

各抜二其刀一之時、出雲建、不レ得レ抜二詐刀一。

とあるところ、新全集では、

各其の刀を抜かむとせし時に、出雲建、詐りの刀を抜くこと得ず。

と、「……むとせし」が補読されている先例に倣って、

しかして、追ひ下すを取らむとせし時にすなはちその石に焼き著かえて死にき。

のようにしたい。

このような私見の根拠は、『日本霊異記』上巻ノ七である。『日本霊異記』は正式名称は『日本国現報善悪霊異記』と言い、悪い行いをして生きている間に悪報を受ける説話だけではなく、善い行いをして善報を受ける説話も収められている。後者の典型が上巻ノ七であると言っても過言ではなかろう。「亀の命を贖ひ生を放ちて現報を得亀に助けらるる縁 第七」の主人公禅師は、大きな亀を買い取って、海に放した。これが善業であるが、禅師の意識はあくまで、亀に対する無償の愛なので、おそらくはその行いのことは忘れた。そして、舟を借りて海を渡ろうとしたのだが、舟人が「欲（むさぼり）を起し」、禅師にも入水を命令する。禅師は止むを得ず入水するのだが、その場面の叙述の仕方に注目したい。

茲に願を発して海の中に入る。水腰に及ぶ時に石を以ちて脚に当つ。其の暁に見れば、亀負へり。（略）是れ放てる亀の恩を報ゆるかと疑ふ。（注19）

「石を以ちて脚に当つ」、即ち、石が足に当たったというのは禅師のその時の主観に即した叙述であり、古代後期文学なら「脚に当つ」の後に「と思ふ」か「とおぼゆ」かそれらと同内容の表現が続くはずである。それに対して、「亀負へり」や「放てる亀の恩を報ゆる」は、禅師が後から冷静に考え直した回想に即した叙述、或いは、客観的叙述である。大穴牟遅物語の〔一〕に於いても、「（八十神が赤い猪を）追い下すのを」というのが主人公のその時の主観に即した叙述、「その焼け石の下敷きになり」から下は、予告なしに客観的叙述に切り換えられているのだと思うのである。

ところで、「赤い猪を待ち構えて殺せ」という兄達の命令を大穴牟遅が本気で実行としようとしたのは何故か。ひとたび発せられた言葉を無にするわけには行かないという宗教的畏怖のようなものを原因として考えるべきだ、という御教示を受けたことであった。しかしながら、そのような神話学的考察は、私に言わせれば、ネタをシャリから剝がし、後からわさびと醤油をなめて、それぞれの原産地を念頭に置きつつ考察する、という研究

方法なのであって、（「古事記で読む」ではなく）「古事記を読む」という本拙稿に於いては、ひとまず、棚上げして置きたい。「古事記を読む」という立場に徹するならば、直前の部分で「稲羽の素菟」が「海塩（うしほ）を浴み、風に当りて伏せれ」という八十神の教えを愚直に実行したのと同様、又、景行記の出雲建が倭建の友情の誓いを誠実に信じたのと同様、大穴牟遅の稚鈍さが原因であると考えるべきだろう。「……なれ待ち取れ」という八十神の命令に背けなかった原因として宗教的畏怖のようなものがあったとすれば、その直後の「もし待ち取らずは、必ずなれを殺さむ」という威嚇は不用だったはずだし、そもそもの殺意の原因が八上比売を巡る嫉妬である点なども、物語全体に余りにも人間臭さが強いのである。

第四説は、「追下」を自動詞とするもので、明和元年（1764）～寛政一〇年（1798）の『古事記伝』を皮切りに、山口佳紀氏・神野志隆光氏の新全集（平成九年六月二〇日）、同じ著者に拠る『古事記注釈　4』（同年六月三〇日）（注20）などに引き継がれている。

「追下」については、他動詞と見る説と自動詞とする説とにわかれる。前者は、古典集成本・倉野『全註釈』・思想大系本のとるところ、後者は宣長にはじまって古典全書本・西郷『注釈』がこれを支持する。ことは下文「余追下取時」とも連動する。文章のうえで照応関係は明らかなのだから、あわせて訓むべきものであり、ともに他動詞と見るか、ともに自動詞ととるかにわかれることとなる。それぞれの訓読の具体例をひとつずつ挙げてみれば、

他動詞説　古典集成本

追ひ下せば……追ひ下すを取らす時に……

自動詞説　『古事記伝』

追ひ下りなば……追ひ下り取る時に……

という次第である。

動詞としての「下」は、「上」と対をなして、自動詞にも他動詞にも用いられるのであり、そのかぎりでは両説ともになりたちうる。

しかし、文脈的照応を生かせば宣長説に従うべきではなかろうか。「追下者汝待取」をうけて「追下取」というのだ。「追下」するのは八十神、「取」るのはオホアナムヂとうけとられる。「八十神が赤猪を追ひ落す（下文に転ばし落しきとある）のであるから、ここはオヒオロスがよいと思ふ」（『全註釈』）というごとき、照応のさせかたは正当ではない。照応は同文的に明確だ。むしろ「かの石を下すこと、

せば、上に転落とあると重なりて、わづらはしきをや」と、宣長が「追下取」についてのべたことを想起せねばならぬ。猪（大石）を追い落すのはその「転落」があらわす。「追下」とは、そのあとを追って下ることではないか。また、「追下取」を「追ひ下すを取らす」（古典集成本・思想大系本）とか「追ひ下すを取る」（『全註釈』）と訓むのは、「取ノ字を上に置カで、下へ連て置るを思フべし」と、やはり宣長の注意したことを思えば、不自然の感を免れない。宣長説に従う所以である。

（神野志）

（『古事記注釈　4』）

この自動詞説に対する私の反論の第一は、動詞が目的語の下に来る語順は、若しくは、そのような語順だと思わせるような箇所は、『古事記』の他の物語の中にも散見するということだ。今、西條勉氏の『古事記の文字法』を手懸りに列挙すると（注21）

○矢刺之時　（注22）
○眞事登波受　（注23）
○丹畫著　（注24）

がある。

自動詞説に対する反論の第二は、話の中心が「猪を待ち構えて殺す」ことにあるのに、「下（くだ）る」と自動詞にヨンでしまうと、主語「八十神」にスポットライトが当り過ぎるということである。

しかしながら、自動詞説に反対するのが私の主眼なのではない。自動詞なら自動詞でいいだろう。

八十神が「追ひ下り」、大穴牟遅神が「取る」の意である。

（新全集頭注）

と考え、

猪に似た大きな石を火で焼いて、転がし落とした。そうして、神々が追いかけて下り、大穴牟遅神がそれを捕まえたところ、

（新全集下段）

と訳すならそれでもいいのだが、むしろ肝心なのは「取る」の目的語が「猪」であること、そしてこの「追ひ下り、取る」が主観に即した叙述、「その石に焼き著かえて……」や「……転ばし落しき。」が客観的叙述であるということである。

三、大穴牟遅神の戦い、その成功と失敗の原因

大穴牟遅神はその後も戦いの連続であったが、その特徴を探ってみよう。

まず〔二〕では、八十神の「大き樹の中へ入れ」という命令に素直に従い、「ひめ矢」を信じたことが失敗の

原因であった。

〔三〕の成功、と言っても一時凌ぎの成功に過ぎないのであるが、「スサノヲを頼って根の国へ行け」という大屋毗古（おおやびこ）の助言に素直に従ったのが良かった。

〔四〕の成功の原因は、「三回ひれを振りなさい」という須世理姫の助言に素直に従ったことにある。

〔五〕の成功の原因も、やはり、「三回ひれを振りなさい」という須世理姫の助言に素直に従ったことにある。

〔六〕の失敗の原因は、「鳴鏑を取りに行け」というスサノヲの命令に素直に従ったことにある。成功の原因は、鼠の言うことを聴こうとし、耳を傾けたことにある。

以上のように、大穴牟遅の神格の特徴は、人や神（動物も）のいうことを尊重し、素直に従う点にある。それが短所でもあり、長所でもあった。山田永氏も「みずからのり越えた受難や試練は一つもないといってよいくらいである」（注25）と述べて居られる。そのようなとっさの主体的判断の鈍さ、人の良さを浮き彫りにするためにも、前節で論述したような解釈はいくばくかの意義を持つだろう。

全集や『鑑賞日本古典文学』のように、「追い落とされた焼石を手に取った時」と訳してしまうと、「猪だと思っていたのに焼石だった」というその時その場の作中人物の衝撃が若干伝わりにくくなるのではないか。

四、古代前後期文学一面

その時その場の作中人物の主観に即して叙述する方法は、『古事記』には、他にも見られるような気がする。

スサノヲの八俣遠呂知（ヤマタノヲロチ）退治の物語（53頁8行目から57頁6行目まで）に関して、西宮一民氏が次のように述べているのは傾聴に値する。

有名な「八俣遠呂知（此三字以音）」というのがある。そこで「切散蛇者」の「蛇」は文句なくヲロチと訓まれてきた。しかし、文脈からすれば、毎年、娘を喫（く）いにくる、赤い酸漿（ほおずき）のような目をした怪物は、「八俣遠呂知」とあるだけで、読者には、最終段階までそれが何であるかは分らない構成となっている、と考えるべきである。それが切り散らされる段階に至り「蛇」の文字が使われることで、「蛇（へみ）」の一種かと初めてわかる仕組になっているのである。したがって、この蛇をヲロチと訓むことは、このストーリーの構成を無視したことになろう。

（集成の「解説」より）

作中の足名椎・手名椎夫妻には、「八俣遠呂知」の正体が何であるかわからない。夫妻にわからない間は読者にもわからないから、夫妻の恐怖を読者も共有することになる。そして、夫妻が正体を知ったちょうどその時、読者も正体を知るような仕組になっているのである。

『古事記』（712年）とほぼ同時代に活躍した柿本人麻呂に

天離る　鄙の長道ゆ　恋ひ来れば　明石の門より
大和島見ゆ（一本に云ふ、「家のあたり見ゆ」）

（『万葉集』255番）（注26）

という短歌があるが、同じ『万葉集』の3608番では

天離る　鄙の長道を　恋ひ来れば　明石の門より
家のあたり見ゆ

柿本朝臣人麻呂の歌に曰く、「大和島見ゆ」

と第五句が改変されている。なるほど、「大和」は「島」ではない。しかし、中国地方か九州地方から東上して来た人麻呂の目には「島」のように見えたのである。「なつかしいふるさとの大和の国は、まだ、島のように小さく見えるだけだ。もっと大きく見える所まで、一刻も早く、近づいてほしい」というその時その場の人麻呂の気持を読者が共有するためには、「島」という一字は重んじなければならない。第五句がもし「大和の国見ゆ」、「大和見ゆ」かそれと似たような表現に改竄されてしまったら、観光ガイドのアナウンスとしてはいいけれど、文学としては全く面白味の無い短歌になってしまう。

古代後期の『源氏物語』の男主人公光源氏が、生涯の伴侶である紫上と出会う場面は、次のように叙述されている。

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

尼君「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。紫「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。このゐたる大人、「（略）」とて立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。

尼君、「いで、あな幼や。言ふかひなうものした

まふかな。おのがかく今日明日におぼゆる命をば何とも思したらで、雀慕ひたまふほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く」とて、尼君「こちや」と言へばついゐたり。

（「若紫」〔四〕）（注27）

紫上は尼君の子であるという波線部は光源氏の主観的認識に他ならない。にもかかわらず、語り手はその主観を急いで訂正しようとしない。そして、二段落あとの〔六〕で、光源氏が尼君の兄弟である僧都から、尼君の孫が紫上だと教えられたちょうどその時、読者も紫上の正確な素性を知るような仕組みになっているのである。

弁慶にとって生涯の伴侶とも言うべきは義経であったが、その出会いの場面は次のように叙述されている。

暁方になりて、堀川を下りに来ければ、面白き笛の音こそ聞こえけれ。弁慶はこれを聞きて、「面白や。只今さ夜更けて天神へ参る人の吹く笛にこそ。法師やらん、男やらん、あはれよからん太刀を持てかし、取らん」と思ひ、笛の音の近づきければ差し屈みて見れば、若き人の白き直垂に胸板白くしたる腹巻に、黄金作りの太刀の心も及ばぬを佩かれたり。弁慶これを見て、「あはれ太刀やな。何ともあれ、取らんずるものを」と思ひて待つところに、後に聞けば、恐ろしき人にてぞおはしける。弁慶いかで知るべき。御曹司はまた身を包み給ひければ、辺りに目をも放たれず。椋の木の下を見給へば、「彼奴も只者にてはなし。この頃都に人の太刀取る者は、彼奴にてあるよ」と思ひ給ひければ、少しもひるまずかかり給ふ。

（『義経記』「巻三」。132～134頁）（注28）

点線部は、「若紫」の波線部と対照的だと言わざるを得ない。作中の弁慶の主観を離れて、我々読者は、出会った相手の「恐ろしき」実力を、予め知ってしまうような仕組になっているのである。そして、この後も、

東枕に打ち伏せて、上に上り居て、押さへつつ、「さて従ふや否や」と仰せられければ、「これも前世の事にて候ひつらんめ。さらば従ひ参らせ候はん」と申しければ、着たる腹巻を御曹司重ねて着給ひ、二振りの太刀を取り持ちて、弁慶を先立てて、その夜の内に山科へ具しておはしまして、傷を癒やして、その後連れて京へおはして、平家を狙ひけり。

その時見参に入り始めてより、志また二心なく、身に添ふ影の如くして、平家を三年に攻め落とし給ひしにも、度々の高名を極めて、奥州衣川の最期の合戦まで御供して、終には討ち死にしたりし

武蔵坊弁慶これなり。
かくて都には、九郎義経、武蔵坊と言ふ兵を語らひて、平家を狙ふといふ聞こえありけり。
（144頁）

のような叙述方法であり、あくまでけんか相手に他ならない義経との強い絆が、当の弁慶よりもだいぶ早く、読者には知らされてしまうのである。

この『義経記』は室町時代の成立とされているが、擬古物語系統の室町時代物語（注29）にも着目したい。

わか君をは、こなたへ、よひたてまつり、そのまにとて、あはのつほねを、御つかいにて、わか君、これへ、入たてまつり給へと、おほせられければ、まいりて、此よし、申ければ
ひめ君は、此事ゆめにも、しらせ給はす、いまたね給へるを、おとろかしたてまつりて、見給へは、中将にすこしもたかひたまはす
いとあはれにて、ともし火のひかりに、見たてまつ
（マヽ）
り給へは、いねむしまはゆけに、めをすり給ふ御ふせひ、らうたく、うつくしく、いふはかりなし
たゝいま、よふけて、なに事に、よひたまふらんと、おほしなから、とく〳〵、おはせよとて、いてたゝせ、たてまつり給ふ
かみならぬ身の、はかなきは、これをかきりと、しらせ給はぬ事こそ、かなしけれ、のちに、おもひあはすれは、なこりおしさ、やるかたなし、いかはかり、後に、くやしくおほしめしける

（『桜の中将物語（写本）』578頁下段～579頁上段）（注30）

夫の正妻側の策略に拠って、子供を奪われた場面であることを、女主人公である「ひめ君」は夢にも知っていない。一方、点線部によって、我々読者には、この場面がいかに重大な瞬間であるかを早くも知らされてしまう。確かにそうした叙述方法のほうが情報量が多く、客観的でわかりやすいだろう。しかし、どちらが文学として優れているかは別として、紫式部という長編作家ならば、特別な事情が無い限り、原則として、「ひめ君」が事態を察した時点で初めて、「なこりおしさ、やるかたなし」、「くやしくおほしめしける」という心理描写をするはずである。

もう一つ注目したいのは、弁慶の心の中と離れて、『義経記』の語り手が、出会った相手・義経に初めから敬語を付けてしまうことである。弁慶が主語の場合、「これを聞きて」、「と思ひ」、「近づきければ」から「大太刀脇挟みて立ち居たりける」に至るまで一切尊敬語が

付かないが、義経が主語の場合、「佩かれたり」、「恐ろしき人にてぞおはしける」、「身を包み給ひければ」から「かかり給ふ」に至るまで、ほとんど全ての動詞に「る」や四段活用の「給ふ」が付き、「おはす」が使われたりする。これも『源氏物語』と対照的である。「若紫」前半では、先に見たように紫上を待遇する敬語はなく、「若紫」後半で、光源氏の心内文にも紫上への敬語が現われるようになって初めて、語り手は地の文で紫上に敬語を付けるようになる。『源氏物語』のこのような面白さ――『源氏』の面白さと言うのは、恐らく多くの古典文学研究者と同じく私にとっても、青表紙本系大島本グループの『源氏物語』の面白さのことであるが――は、平成三年の中村一夫氏の論文に拠って、余す所なく、解き尽くされている。

①なに事そやわらはへとはらたち給へるかとてあまきみのみあけたるにすこしおほえたるところあれはこなめりとみ給

尾「うち見あけたまへるまみ」　陽「みあけ給へるまみ」　中「うちみあけ給へるまみの」
麦「うちあけたるまみ」　阿「うち見あけたるまみ」

尾「おほえたまへは」　陽「おほえ給へは」
中「おほえ給へれは」　麦・阿「おほえたる所あれは」

②つみうることそとつねにきこゆるを心うくとてこちやといへはつゐゝたり

尾・陽「こちやといへはついゐたり」
中「こちやとのたまへはついゐ給」
麦・阿「こちやといへはつゐゝたり」

（略）

①は紫上の登場の場面からのものである。惟光とともにかいま見ている源氏の意識にそった表現だが、陽明本、中山本、尾州家本では尼君や紫上など、まだ素性のわからないはずの未知の人物にまで敬語を使って待遇している。②も①と同様で、尼君に叱られる紫上に対して、中山本では素性がわからないはずなのに二人にそろって敬語が使われている。

（略）

いずれも光源氏の目から見、その意識にそった表現と考えるならば、敬語のない方が彼の視線と思考を追いかけた生々しい表現となる。ひとしなみに敬語で人物を待遇してしまうと、客観的で画一化した印

象となるのは否定できない。敬語で待遇するのは登場人物の素性をはっきりつかんでいてこそできるものであることを考えに入れると、こうした表現は書写者の書写以前の物語の理解に基づいたものと指摘することができよう。確かにそうした表現を持つ本文は情報量が多く、客観的でわかりやすい本文であるといえるかもしれない。河内方がその校訂方針として不審箇所をなくそうとしていったことが想起される。しかし、それが物語の表現として優れているかといえば、否定的にならざるをえない。大島本の本文は作中人物の意識にそったものとなっており、主観的に追体験しやすいため臨場感のある表現になっている。他の伝本のように始めから敬語で待遇されていると、徐々に未知の人物の正体が解き明かされていくというおもしろみに欠ける表現となってしまう。（注31）

尾州家本など河内本、陽明本、中山本などの別本は、敢えて言えば、『義経記』的な本文、中世的に脚色された『源氏物語』であり、私も中村氏の驥尾に付して、「青表紙本の敬語のありかたがより古い形を伝えている」と判断したい。河内本や別本と青表紙本との異同箇所は、他の古典文学作品の系統の違う本文同士に比べて、数も少ないのであるが、その中には、一見親切で「わかりやすい」河内本や別本を選んでしまうと見失ってしまう、『源氏』独特の「おもしろみ」がひそんでいるのである。

五、結語

古代後期文学の研究史を顧れば、二十世紀後半には、「近現代的な先入主」の排除というスローガンが声高に叫ばれたことであった。その結果、〝近現代的な発想〟の代わりに〝中世的な発想〟が先入主として入り込むことになったら、五十歩百歩である。古代後期文学は、中世文学よりは、古代前期文学に引きつけて行うべきであろう。中世文学を古代文学の下にランク付けしようなどとは毛頭考えていない。ただ、中世文学研究は、中世文学が中世に入って新しく獲得した魅力の発見に努めるべきであって、中世的な先入主に引きつけて古代文学を研究し、中世的に脚色された『源氏物語』像を、「これこそ『源氏物語』の姿だ」と断わりなしに呈示するのは、問題だと思うのである。改変された本文の物語世界がいかに豊饒に見えても、〝改変〟と〝原態〟の区別は、可能な限り、見極めて行かなくてはならない。それには、極めて広い意味での文法・語彙・語法の〝原態〟の時代と〝改変〟の時代との違いを詳細に知ること、つまりは、国語の通時的考察が重要であろう（注32）。

なるほど、研究テーマによっては、例えば、明治以降と江戸以前とに大きく二分してしまった方が実際的かもしれない。又、例えば、上代と平安以降とに大きく二分してしまった方が実際的かもしれない。しかし本拙稿で着目したような「作中人物の主観に即した叙述」は、統計を取ったわけではないが、どちらかと言えば、啓蒙的な室町時代文学（注33）よりも、古代前後期文学に多いような気がする。

『源氏物語』を河内本や別本で読んでしまうこと、『古事記』61頁5行目の「追ひ下すを取らす時に」をその直後の、及び4行目の客観的叙述に引きつけて解釈すること、「蛇」をヲロチと訓んでしまうこと、「……明石の門より　大和島見ゆ」という人麻呂歌を「……明石門より　家のあたり見ゆ」と改竄してしまうこと、これらはいずれも、古代前後期文学独特の魅力の一端を埋もれさせてしまう結果に成りかねないのである。

注

（1）平成一三年。「はじめに」「あとがき」は書き下ろし。

（2）平成七年『古事記の表記と訓読』「第三章　音仮名の論　第四節　表現と成立――音仮名表記をめぐって――」。初出は平成四年「古事記の表現と成立――音仮名表記をめぐって――」（『上代文学』68号）。引用は再録に拠る。

（3）新全集解説。ここに引用した「七」は神野志氏の御担当。

（4）昭和四年『定本源氏物語新解』。

昭和五七年岡一男氏『解釈と文法　源氏物語』も、河内本のほうが通じやすいと述べている。

この部分の諸本本文を『源氏物語大成　校異篇』に拠って示すと、青表紙本系大島本は「よもの山のかゝみとみゆるみきはのこほり月かけにいとおもしろし」、【河内本】みきはのこほり月かけに――月かけにみきはのこほれるわたり（全河内本）／いとおもしろし――いといとおもしろし（七毫源氏）――いとおもしろく（国冬本）、【別本】かゝみとみゆる――かゝみとみゆる（保坂本）――かゝみみえわたる（平瀬本）／みきはのこほり…おもしろし――月かけにみきわのこほれるわたり（保坂本）――月かけにいとおもしろくみきはのこほれるわたり（平瀬本）／おもしろし――おもしろく（横山本）

（5）「雪と月――総角巻末独詠連作段落の再評価――」。

『国語国文』所収。

一見、河内本や一部の別本のほうが通じやすいこの箇所も、青表紙本が文学的に優れ、紫式部の発想に合っている旨述べておいた。

(6)「源氏物語について」。『思想』大正一一年十二月号に初出。

(7)「源語成立攷――擱筆と下筆とについての一仮説――」。『国語国文』昭和一五年四月号に初出。昭和四一年『源氏物語研究』に再録。

(8) 楢原茂子氏「源氏物語第一部成立論史並びにその評論」(昭和五二年吉岡曠氏編『源氏物語を中心とした論攷』所収)の「四　輝く日の宮の巻」。

(9) 平成三年「かの十六夜の女君――葵巻晩秋の新解釈――」(『中古文学』47号所収)、平成一二年「光源氏物語物語現行形態試論第六――先行物語の季節――」本誌15号所収)、平成一四年「光源氏物語現行形態試論第七――長編始発説の意義――」(『富山大学人文学部紀要』36号所収)等の拙稿を参照されたい。

(10)『国文学解釈と教材の研究』平成三年五月号所収。

(11)『国文学解釈と教材の研究』平成七年二月号所収。

(12) 本誌11号所収。

(13)「源氏物語の最初の形態」。『文学』昭和二五年六、七月号に初出。『国文学解釈と鑑賞別冊　源氏物語をどう読むか』(昭和六一年四月)等に再録。

(14) 片桐洋一氏の研究。この問題については、平成一二年「伊勢物語三段階成立論続貂第二――六つの批判への再反論と第四十五段詳述――」(『富山大学人文学部紀要』33号所収)や平成一三年の「伊勢物語三段階成立論続貂第三――七つ目の批判への再反論と自然描写詳述――」(本誌16号所収)の第2節で述べた。

(15) 集成の底本である真福寺本の原表記は左記の通りである。割注は〔　〕内に記すことにする。新全集78頁に拠る。

故爾、八十神、忿欲レ殺二大穴牟遅神一、共議而、至二伯岐国之手間山本一云、赤猪、在二此山一。故、和礼、〔此二字以レ音。〕共追下者、汝、待取。若不二待取一者、必将レ殺レ汝、云而、以レ火焼二似レ猪大石一而、転落。爾、追下、取時、即於二其石一所二焼著一而死。

(16) 平成元年『神田秀夫先生喜寿記念　古事記・日本書紀論集』に初出。山口氏『古事記の表記と訓読』に再録。初出に拠る。

(17) 明治三五年初版吉川弘文館発行『校訂古事記伝』に拠る。

(18) 平成一四年六月『口語訳　古事記　〔完全版〕』。

(19) 引用は、平成八年新大系に拠った。平成七年新全集に拠ったとしても、論旨に変更はない。参考までに釈文と現代語訳（振り仮名は省略することにする）を記して置く。

茲に於て、願を発して海中に入る。水腰に及ぶ時に、石の脚に当りたるを以て、其の暁に見れば、亀の負へるなりけり。（略）疑はくは、是れ放てる亀の恩を報ぜるならむかと。

そこで禅師は仕方なく願を起して、それからおもむろに海の中に入って行った。水が腰の深さぐらいまでつかった時、ふと石が足に当っているように思えた。そこで夜明けの光で見ると、亀の背の上にいるのであった。（略）これはおそらく放してやった亀が恩を返したものであろうか。

(20) 当該場面を含んでいるのが、この『古事記注釈4』である。

(21) 平成一〇年『古事記の文字法』「第十一章　文字構文の方法」に拠る。この第十一章は書き下ろし。

(22) 昭和四九年高木市之助氏富山民蔵氏『古事記総索引　本文篇』に拠る。上28オ。

(23) 注（22）の書に拠る。中31ウ。

(24) 注（22）の書に拠る。下36ウ。

(25) 平成一三年『古事記スサノヲの研究』「第九章　オホアナムヂへの祝福の言葉」。初出は平成一〇年『上代文学』81号。再録に拠る。

(26) 引用は、昭和四六年～昭和五〇年の全集本に拠る。

(27) 引用は、平成六年～平成一〇年新全集に拠る。

(28) 引用は、平成一二年新全集に拠る。

(29) 昭和四〇年松本隆信氏「擬古物語系統の室町時代物語――「しぐれ」「若草」「桜の中将」「志賀物語外――」（『斯道文庫論集』4所収）で研究テーマと成っている諸作品を念頭に置いている。

(30) 引用は、『室町時代物語大成』に拠る。

(31) 中村氏「若紫巻の本文――源氏物語別本の敬語法――」。『中古文学』48号所収。

この論文で底本として用いられているのは青表紙本系大島本。略称は左記の通り。

尾　尾州家河内本
陽　陽明文庫本
中　中山本
麦　麦生本
阿　阿里莫本

(32) 注(14)で触れた「伊勢物語三段階成立論続貂第二」の序節も、平成八年「青表紙本改訂の必要性――総角巻の「暗し」と「聞こゆ」をはじめとして――」(『富山大学人文学部紀要』25号所収)も、このような立場からのアプローチであり、『伊勢物語』狩使本の幾つかの伝本だけを見て、或いは、『源氏物語』の多くの伝本の中から原態を夢想したつもりはないので、改めて参照して頂ければ幸いである。「作品の像を焦点化する眼力」などという言葉で言い表わされるような観念的なアプローチでなく、総角巻「暗し」と同巻の「聞こゆ」、橋姫巻の「故君」、それぞれに就いてできる限り具体的な根拠を示しつつ本文批判をしたので、改めて参照されたい。

少なくとも今まで発表して来た『源氏物語』の拙稿で取り上げた箇所に関しては、①青表紙本系の大島本グループや、宇治十帖中の幾つかの巻々については、①に近い②尾州家本見セ消チ補入前本文(私個人はこれこそ河内本の初期の姿だと愚考している)でなければ、最も肝心な魅力、個性的なところは味わえない。③学界一般に河内本と思われている河内本や④別本を、異端として排除する気もないが、やはり、中世的に脚色された箇所が相対的には多い『源氏物語』だと思っている。その根拠はあくまで国語の通時的考察にあるのであって、青表紙本への絶対的な信頼、青表紙本系大島本の優秀性などという神話にあるのではない。小学館全集・新全集、岩波新大系、新潮集成(以上、微細な違いはあるが、いずれも原則として①を底本とする)に基づいて論を成す多くの先学・同学・後進も、それを公に口にするかどうかは別として、皆様それぞれに青表紙本を相対的に原態に近いとする確たる理由をお持ちなのではなかろうか。ともあれ、私が①や②など青表紙本的な『源氏物語』に頑にしがみついているのは、多分、「神世七代と称ふ」という一見つじつまのあわぬ文章で始まる『古事記』をおいしい「御馳走」として味わう山田永氏と同じ気持からである。

(33) 但し、ここで念頭に置いているのは、あくまで、注(29)に記した松本氏論文及び同氏昭和四二年「古物語系統の室町時代物語(続)――「伏屋」「岩屋」「一本菊」外――」(『斯道文庫論集』5所収)で研究テーマと成っている諸作品のみである。

〔付記〕本稿は平成一四年三月北陸古典研究会の口頭発表「追い下された赤い猪――大穴牟遅神の人間像――」を大幅に加筆修正したものである。席上、司会の労を

お取り下さった馬場治先生、その時点で事務局をなさっていた山下久夫先生、その時点で『古事記伝』の研究会に於いて当該箇所を検討済みであられた山本一先生をはじめとして、多くの会員の皆様に貴重な御教示を賜わった。その後の書き足しの文責は勿論私一人にあるが、大穴牟遅神の物語の記述に関しては研究会で得た学恩に負うている。記して心より謝意を表します。

（たむら・しゅんすけ）